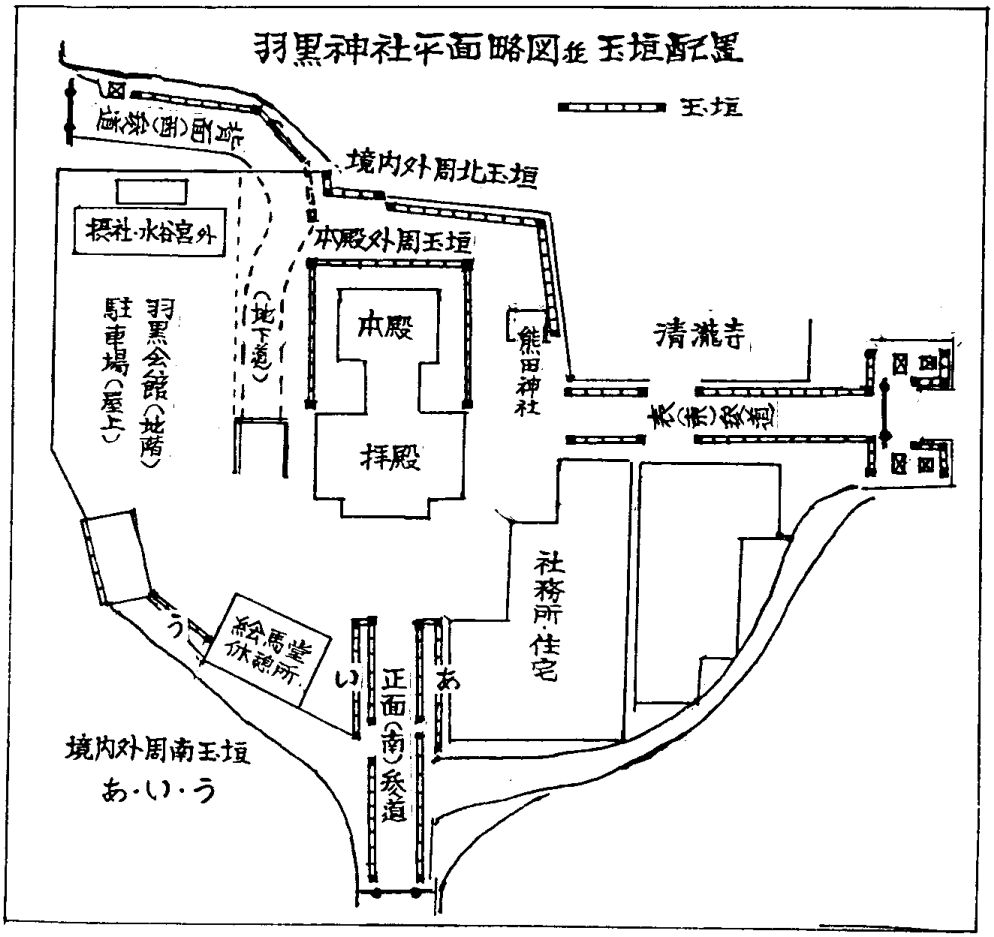
玉嶋いしぶみ探訪記

羽黒神社玉垣考

別巻



もくじ

本殿外周玉垣　2～5（ページ）
　配置と刻銘
　解説・資料・写真
正面参道玉垣　6～7
　配置と刻銘
　解説・資料
境内外周（正面参道の上）玉垣
　配置と刻銘　8～10
　資料及写真と解説
表参道玉垣　11～15
　配置と刻銘・資料
　写真と解説
境内外周（北側）玉垣
　配列と刻銘　16～18
　写真と解説
玉垣配列の複雑さ　19
　境内外周と背面参道
背面参道玉垣　20～22
　配列と刻銘
　写真と解説
総括　23～24
　解説と写真

本殿外周の玉垣配置と刻銘

玉垣の重厚な感じは社殿との調和を計算に入れた江戸時代職人の優れた技であろうか。

安政二年(一八五四)九月に建立整備された玉垣が僅か三年後に幣帛供昇殿門の建造設置で一部に変動があったのではないかと推察される。柱間には小柱が六本ずつ配列されているが、昇殿門付近では乱れがある。

先ずは本殿西側玉垣の南端、親柱二本[3ページ下部㊙㊀]とその柱間の小柱六本は後からの付け足しではなかろうか。「奉献」及び寄進者名の

安政三丙辰年九月吉祥日建之
奉献
奉献
奉献

柱間約160cm
柱
擬宝珠をもつ親柱
笠石の下に，たてよこ約18cm，長さ約110cmの小柱が並ぶ。
柱間笠石の寸法
笠石の長さ約160cm
高さ約18cm
ホゾ
高さ約9cm
幅約24cm
擬宝珠をもつ親柱とその寸法
擬宝珠
約60cm
約30cm
約30cm
全長約190cm
約130cm
柱の幅はたてよこ30cmの角柱
笠石
ホゾ穴
根石
擬宝珠の直径 約27cm
擬宝珠の基部 外周約81cm

字体が整い彫りが浅く力強さに欠け、石も何とな
く新しく製作時期や職人の手が違うように思われ
る。（下の写真と次ページ写真・対比参照）
昇殿門両脇の玉垣では柱間の小柱の数に違いが
見られる。もともと昇殿門の位置にあった幾本か
の小柱の移動先は見当がつかない。

次に親柱を注意深く見ると「奉献」の文字の字
体の違いや「奉献」が無くて「阿州」と大書した
ものも見られる。下の写真のように
「奉獻」と文字が縦に並ぶ（3ページ㋒・2
ページ㋓㋕）と奉獻と横に並ぶ（2ページ㋔）な
どと違いも見られ、違いの理由や意図は
わからない。

とにもかくにも、ノミとツチだけで擬
宝珠の複雑な形を彫り出した江戸時代の
職人の技や腕に感嘆するのみ。

百五十年経た今、玉垣に残る謎は幾つ
もあるが、「連島左宮駒二郎」の名前が
逆様に彫りこまれた不思議（2ページの図の
中ほど）……一介の職人分際で親方の名
前と肩を並べるのはもとより、玉垣に名
を連ねることは憚られるという意志から
であったのか……「連島㋐戸城屋駒次
郎」とはどのような人物で、羽黒神社再建にどの
ようなかかわりがあったのかなど、にわかにはわ
からないまゝに謎を秘めて興味を呼ぶ。

本殿外周玉垣の西側、拝殿に接する南端部分。親柱二本に刻ま
れた文字が楷書的で安政二年建立のもの（次ページ写真）とは趣きが
異なる。小柱三本は東側の昇殿門の所にあったものの一部が移
されたと推定している。

憶測をたくましくする

西出孫左衛門……戦国武将朝倉氏の豪老の子孫といい、江※

本殿外周玉垣の東北角柱と東側玉垣の一部。意匠をこらした擬宝珠をもつ親柱の林立は荘観であると共に、神仏習合の色彩を強く感じさせる。

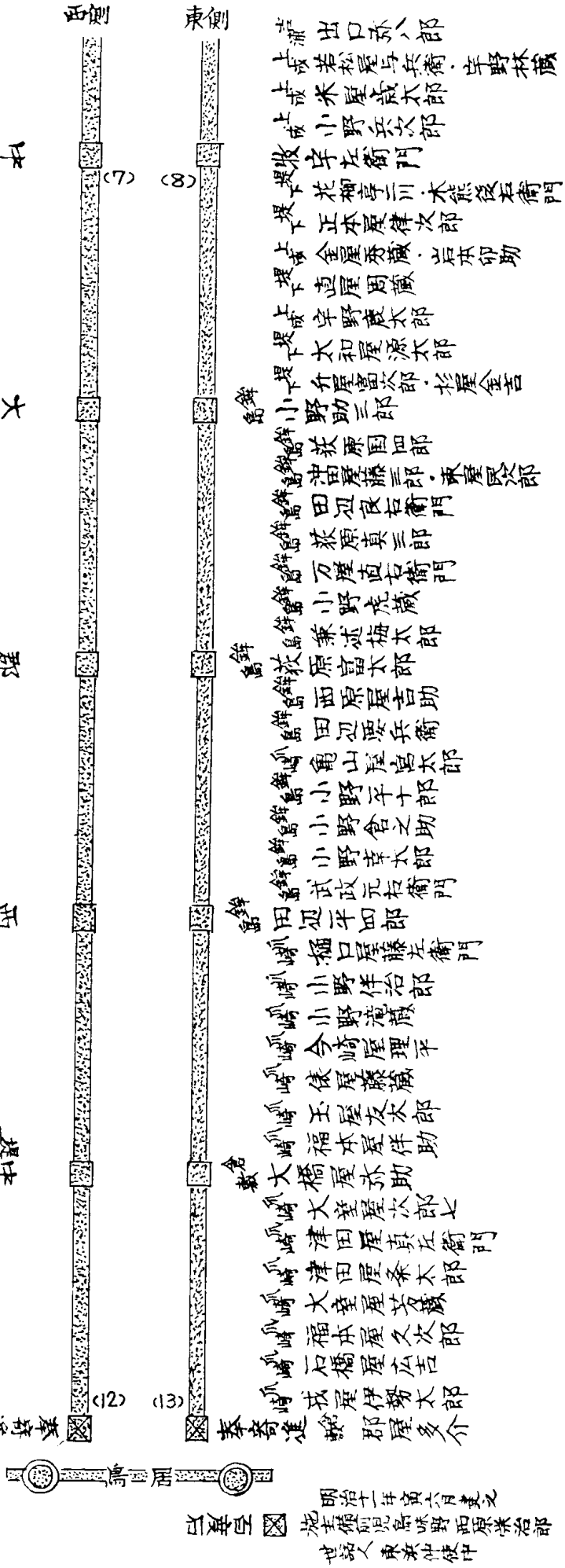
本殿外周玉垣の寄進者居住別数

親柱二二本　小柱一一四本　総数一三六本

寄進者実数一二四人　〔一人で四～二本の寄進　九人　二人で一本を寄進　四人〕

1. 阿州〔四国阿波国　藍商人か〕三人〔六本（親柱二・小柱四）〕
2. 丸亀三人（小柱三本）
3. 大阪二人（小柱六本）
4. 能登輪島〔北前船か〕一人（小柱一本）
5. 雲州毋屋〔出雲国毋屋〕一人（小柱一本）
6. 福山一人（小柱一本）
7. 備後一人（小柱二本）
8. 岡山二人（小柱二本）
9. 惣社〔総社〕一人（小柱一本）
10. 倉敷二人（小柱二本）
11. 天城一人（小柱一本）
12. 新見二人・大野部〔吾西町大野部〕一人（小柱二本）
13. 吹谷〔吹屋〕三人（小柱三本）
14. 連島二人（小柱一本）
15. 鉾島四人〔四本（親柱一）（小柱三）〕
16. 長尾一人（小柱一本）
17. 小崎三人（小柱三本）
18. 玉島湊九〇人〔九六本（親柱一九　小柱七七）〕

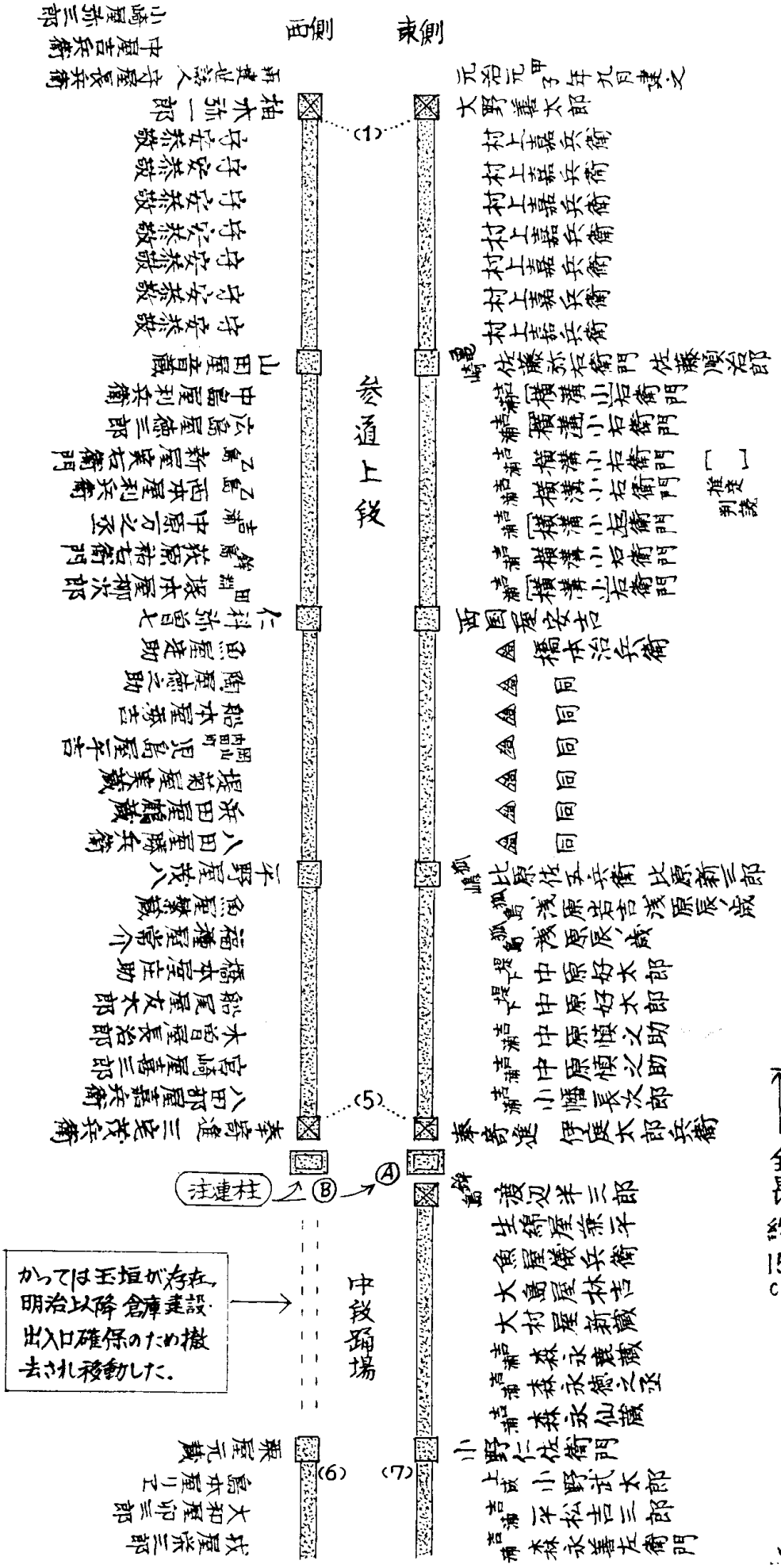
※戸時代、北陸加賀で北前船船主として栄え、代々孫左衛門を名乗った豪商。二代目の時、持船が安永七年（一七七八）には備中玉島湊に入港、以降船商売が続いたという。現在の西出商店とのつながりが考えられるだろうか。　その他、玉垣に見られる木屋・銭屋・魚屋・茶屋・桝田などいづれも北陸の船主・豪商の屋号。江戸後期玉島湊に支店を置いたのか…



正面参道　玉垣配置と刻銘

同じ構造ではあるが、正面参道玉垣の親柱・小柱はともに本殿外周玉垣の親柱・小柱よりひとまわり小振りに作られ、擬宝珠の基竿の鉢輪も一組少ない（P3・P7の図対比参照）など、本殿に対してひかえめな配慮がうかがえる。

また、寄進者の大半は玉島湊とその近隣……鉾島・爪崎・上成・堤下・吉浦・乙島……が占め、他地域では僅かに倉敷三・岡山一・田淵（不明）一と数えるほどというのも特異。理由についてはわからない。



かつては玉垣が存在、明治以降倉庫建設・出入口確保のため撤去され移動した。

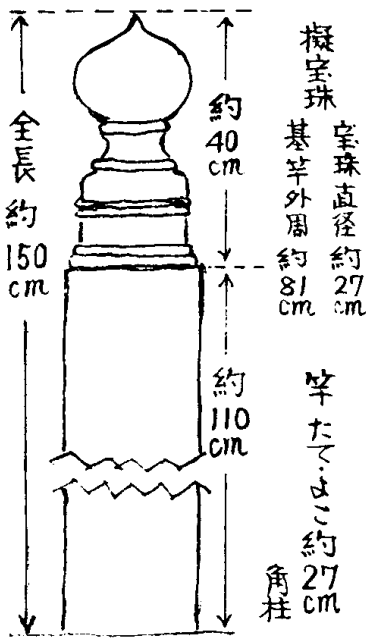
注連柱(しめばしら)の刻銘
(注連縄を張るための柱)

Ⓐ 我治さくら
五月吉辰 願主 井上栄三郎 仁科弥曽七

Ⓑ 所許色神習
明治九年 願主 大西久左衛門 小野善衛門

小柱の寸法
たて・よこ 約15cmの角柱で長さ約66cm

親柱の形と寸法



〔P1・図・あ〕東側

(正面参道)
最上段

(1)

三宅品治郎
石橋新

Ⓐ 丸野幸十郎
林手綱十
亀山増造
森永電之助
河手虎吉
池田仁太郎

Ⓑ 中田八重吉・小橋鶴三郎
三宅富次郎
佐吉丸長次郎
中橋勝太郎
原田小太郎
渡藤喜八郎
渡藤太三郎
三沼川亀太郎

Ⓐ 高見定蔵
小山甲里子
小幡徳三郎
安原万次郎
飛沼利吉
横溝増太郎
清水孝次郎
上野利吉

Ⓑ 尾上吉子
伊藤竹五郎
武縄吉太郎
秋山嘉吉
亀山清三郎
渡辺吉沼郎
大田嘉吉

Ⓐ 今井葉子
難波辰吉
吉城大子
蔦口源沼郎
秋田金沼郎
斎藤恒沼郎
岡本多田郎
山口鉄太郎
亀山和子

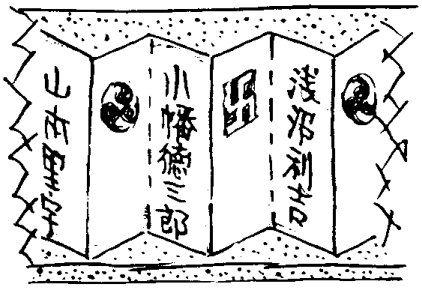
Ⓑ 佐藤米三郎
中藤菊蔵
中野米次郎
菅野幸沼郎
笹田大林和三郎
秋田吉三郎
奉寄進
渡辺花蔵

Ⓐ (8)

(3)

境内外周 南側 玉垣配置と刻銘

Ⓐ…トモエとマンジの型紋が交互に配り
Ⓑ…卐
こまれ、特に二柱は平たい一枚石の表面(正面参道に面する側)は屏風状に石を削り(下図)社殿に向く面に寄進者氏名を、その反面にトモエヌはマンジの型紋を交互に配置する凝った構成になっていて、特色が感じられる。



屏風状になった小柱
(背面は平面で無地)

〔P1・図・い〕西側

(1)

西重助
西重助

Ⓐ 明治田吉蔵
江口政吉
山田伊太郎
野口清太郎
西林佐太郎
岡崎安衛
急岡接山
伊藤亀
中原理助
長尾兵衛
吉井藤助
安藤山
亀沢吉
赤井吉
広井吉
三宅今野
中山大
村上精一郎

Ⓑ 同 同 同

正面参道の最上段東側玉垣の一部とその奥の石垣上に沿った境内外周の玉垣（建物は社務所兼住宅の一部）

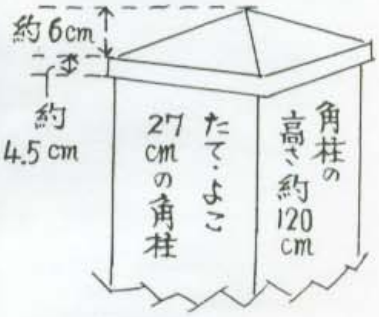
正面参道の玉垣もまた擬宝珠をもつ角柱が並び，約150cmの柱間にはそれぞれ小柱7本が立つ。元治元年（1864）再建の銘文がみられ，社殿の全面再建の大事業の締めくくりに，本殿外周の玉垣整備にあわせて，本殿玉垣よりひとまわり小振りな構造をもって整備し主要参道に花を添え，羽黒神社の神域一新を図ったのであろうと推測される。再建前の玉垣がどのようなものであったかは不明。

正面参道の登り口東側の玉垣の一部

正面参道の最上段両側玉垣の一部と石垣上に沿った境内外周の玉垣

境内玉垣は正面参道玉垣とは全く趣を異にする平たい角堆の笠をかぶった親柱（右の図）、小柱もまた柱ではなく、参道に面した表側は屏風状になっており、裏側は下の写真に見られるような一枚石であることが大きな特色である。　明治15年（1882）建立のこの玉垣は明治初めの神仏分離令の影響を受け精一杯に工夫と知恵を働らかせた造形であろうと思う。

▼親柱の形と寸法▲



境内外周玉垣の裏側を拝殿脇付近から見た状態……長方形の平たい一枚石が親柱の間に見える。

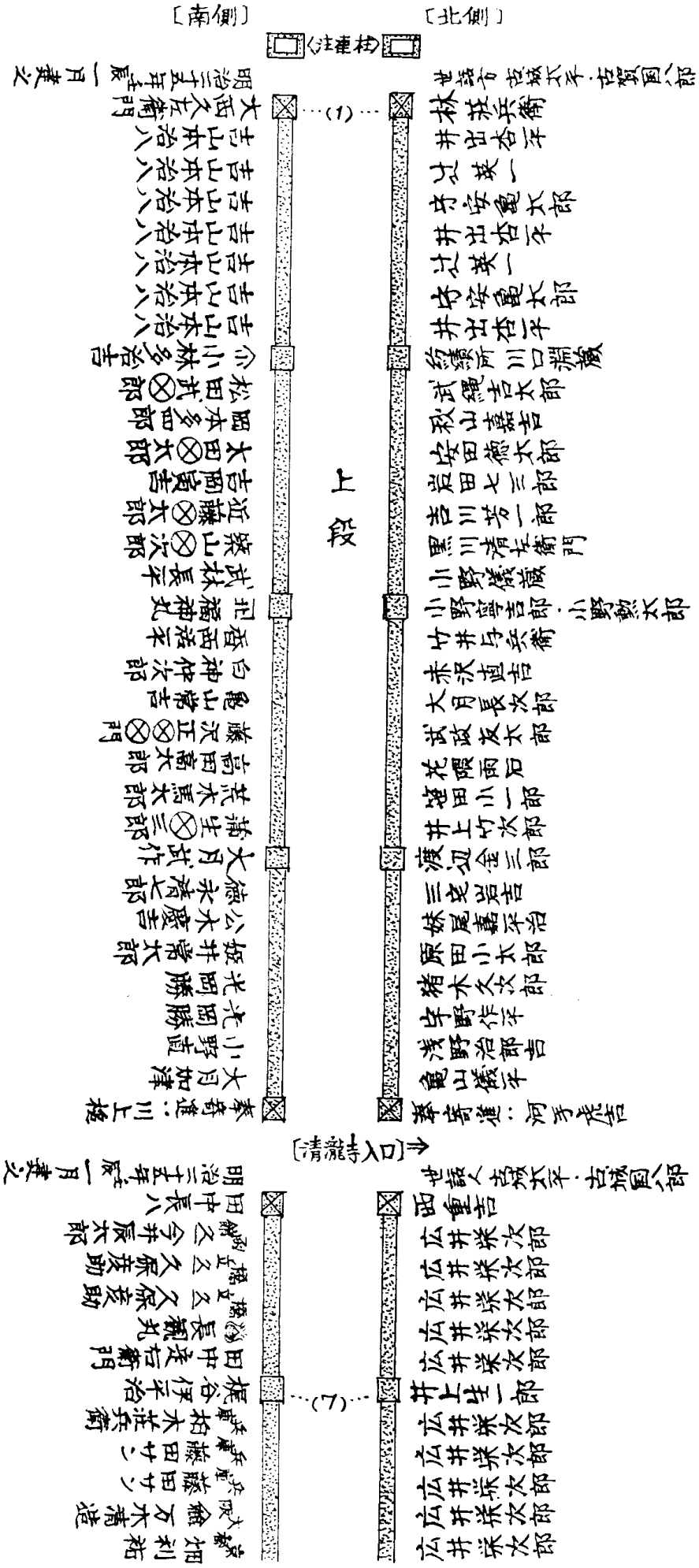
表(東)参道 玉垣配置と刻銘

玉垣柱の総数と構成

親柱　六七本（北側三四・南側三三）

小柱　二八三本（北側一四三・南側一四〇）

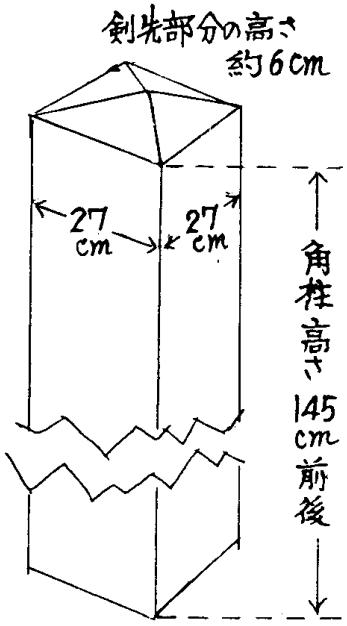
柱間の小柱数　上段七本ずつ　中段五本ずつ　前段三本ずつ



◆ 小柱の寸法

たて・よこ約15cmの角柱で高さ63cm前後

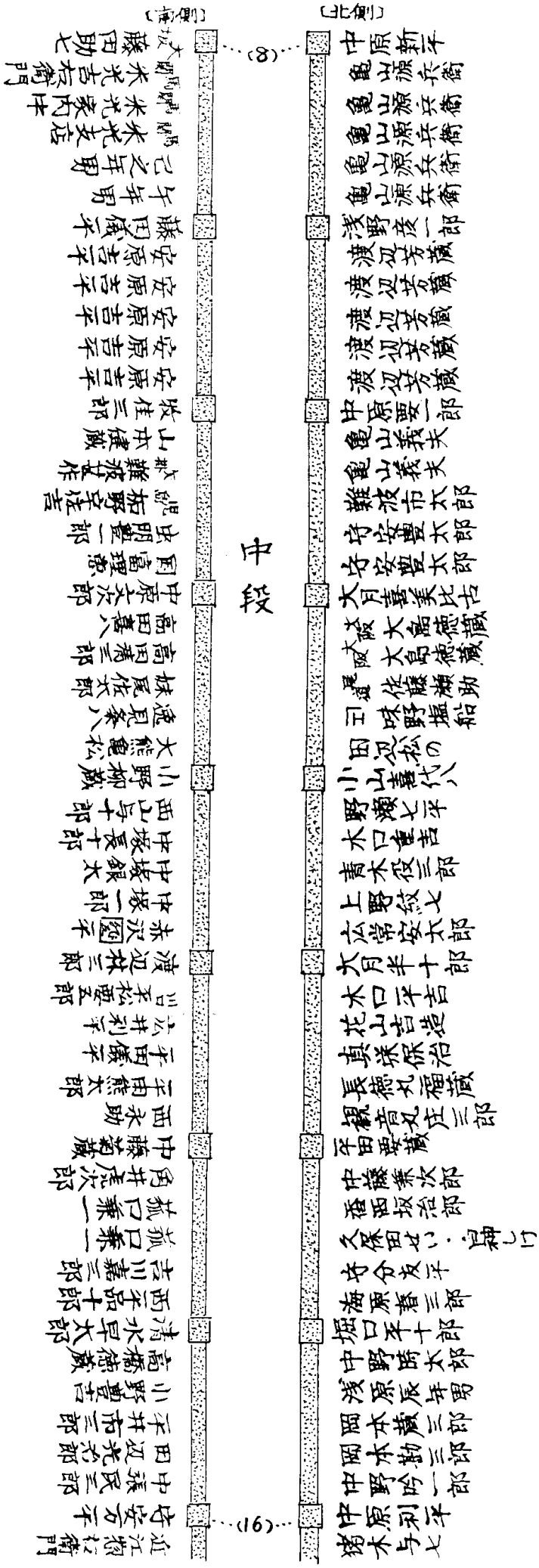
◆ 親柱の形と寸法



＝続　表参道　玉垣＝

南側の玉垣小柱には風化損傷のため刻字が判読できないものが目立つ。

⊗判読不能



柱銘

北の柱（表）思敬（裏）昭和十三年三月吉祥日

南の柱（表）致誠（裏）

表参道刻

願主
玉島町
山本直次郎
山本二郎
山本三郎

明治二十五年玉垣建立の背景には、その前年……明治二十四年七月山陽鉄道が岡山まで開通したが、この時港がさびれると騒いで、玉島駅を長尾村の田んぼへ追いやった玉島湊の人たち……湊の発展・繁栄を願っての取組みであったと推測する。

玉垣寄進者にも新しい時代の流れを感じさせる。

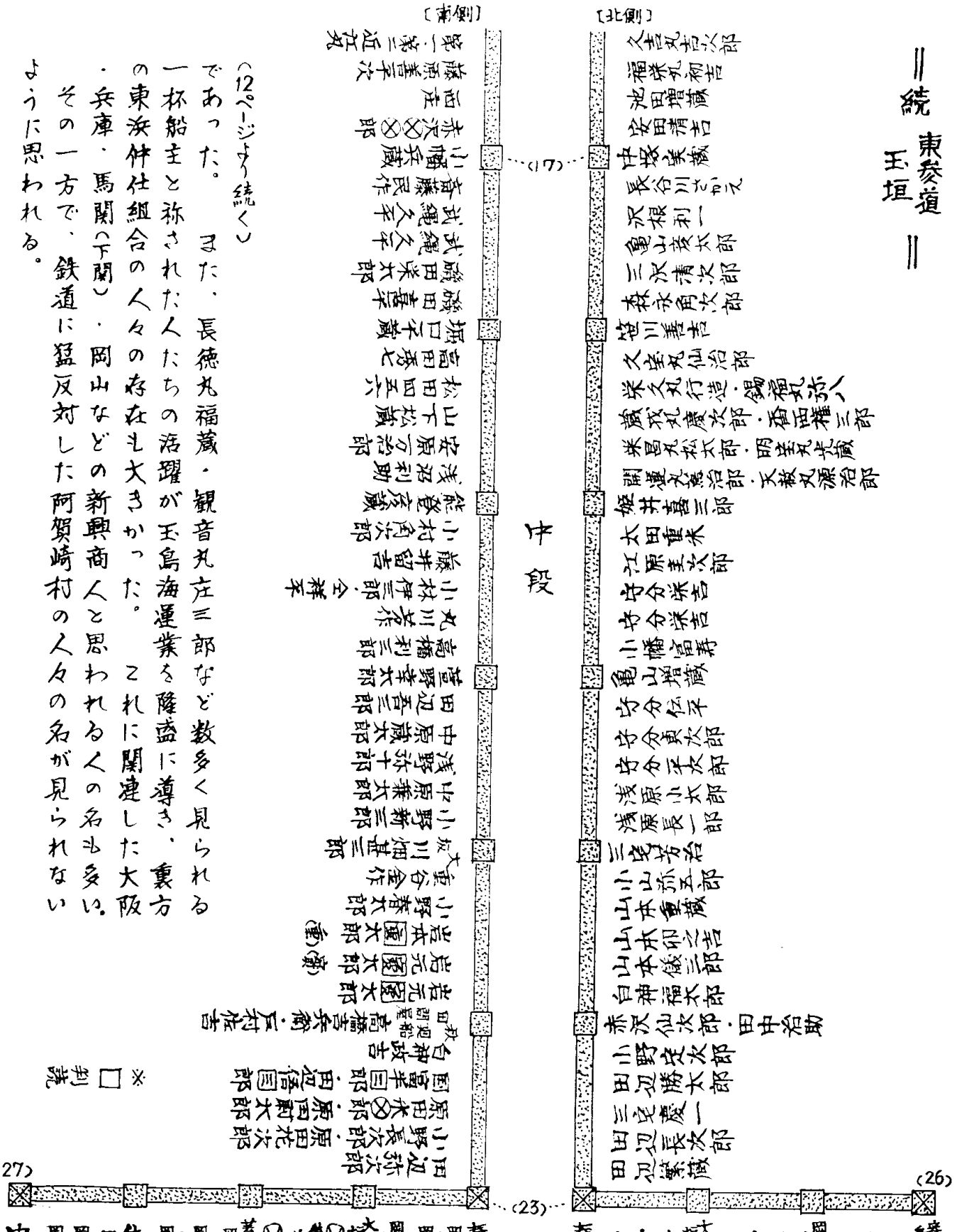
明治十四年乙島村野浦田沖に操業を開始した玉島紡績所は湊町に活性化をまねいた新しい産業 （14ページへ続く）

表参道の整備は一日にして成らず

①寛政三年（一七九一）阿形の獅子（下の写真中央）吽形の狛犬（15ページ写真中央木の茂みの下）大阪の阿波藍商人仲間が大阪で作らせて船で運んできた。②寛政五年（一七九三）石灯籠一基 高橋忠四郎導高寄進（下の写真右寄り羽黒神社看板にかくれて姿がわずかに見える）③寛政八年（一七九六）石灯籠一基 松山高瀬講中寄進（15ページ写真左寄り）④明治二十五年（一八九二）玉垣建立…併せて石段も造られたと考えられる。⑤昭和十一年（一九三六）石鳥居 乙島・福武敏重寄進

⑥昭和十三年（一九三八）注連柱一対 玉島町山本直次郎・二郎・三郎寄進（上の写真 参道最上段の左右の石柱）

‖ 続 東参道 玉垣 ‖

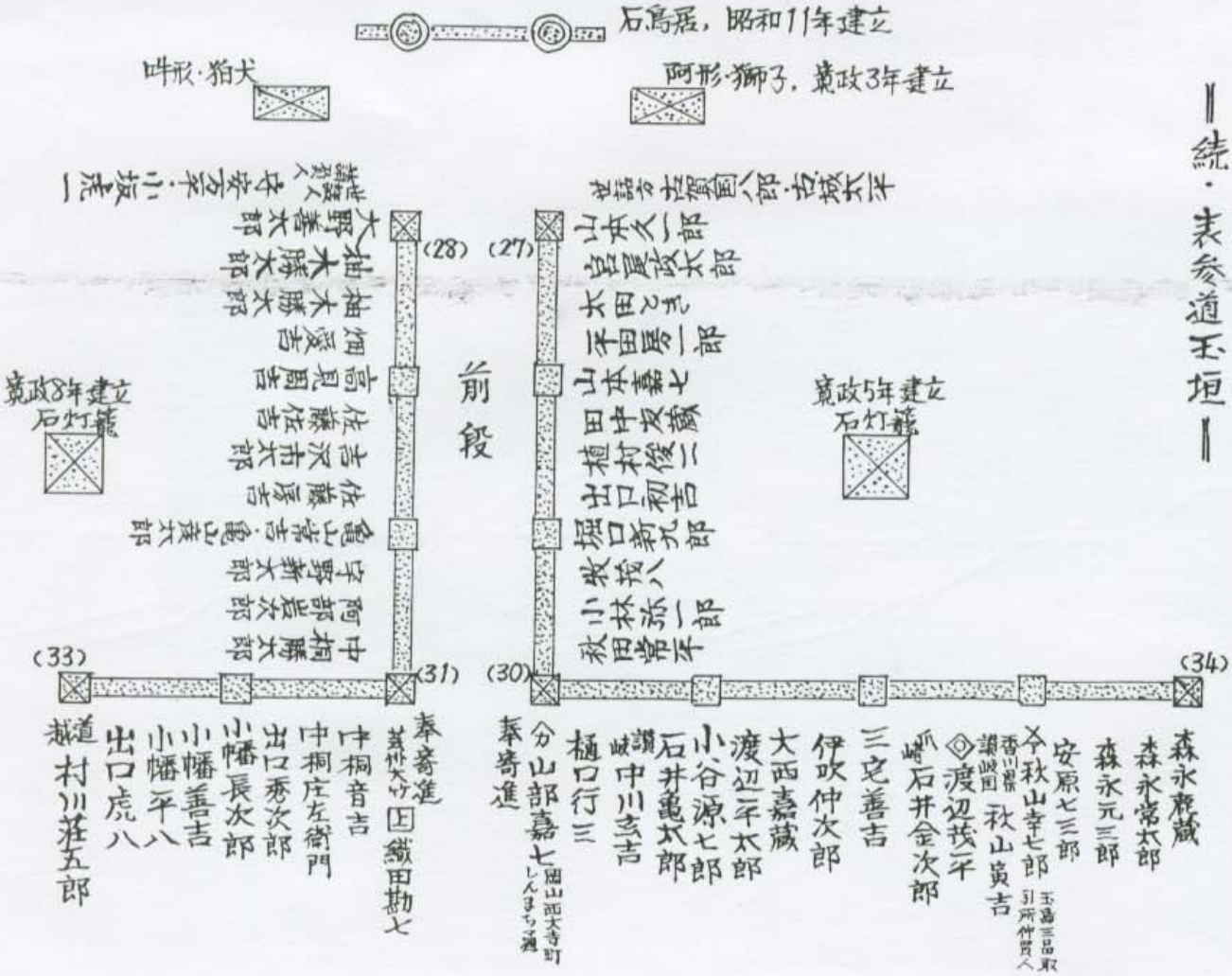

〔北側〕
〔南側〕
中段
(17)
(23)
(26)
(27)
奉寄進 三宅富次郎
奉寄進 柚木梶雄
東浜方中
東浜方中
東浜方中

写真説明

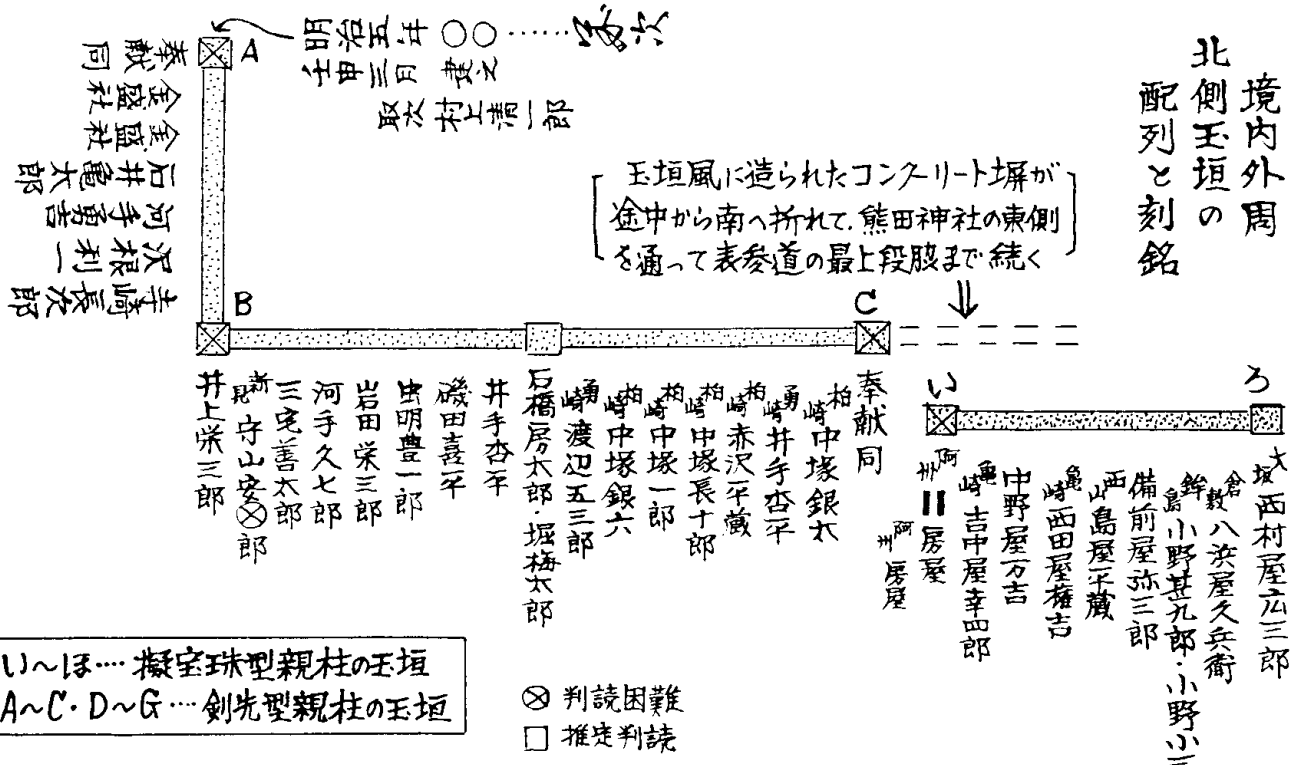
(1) 13ページ上の写真は表参道上段の玉垣・注連柱を見通して羽黒宮拝殿の東側面を望む

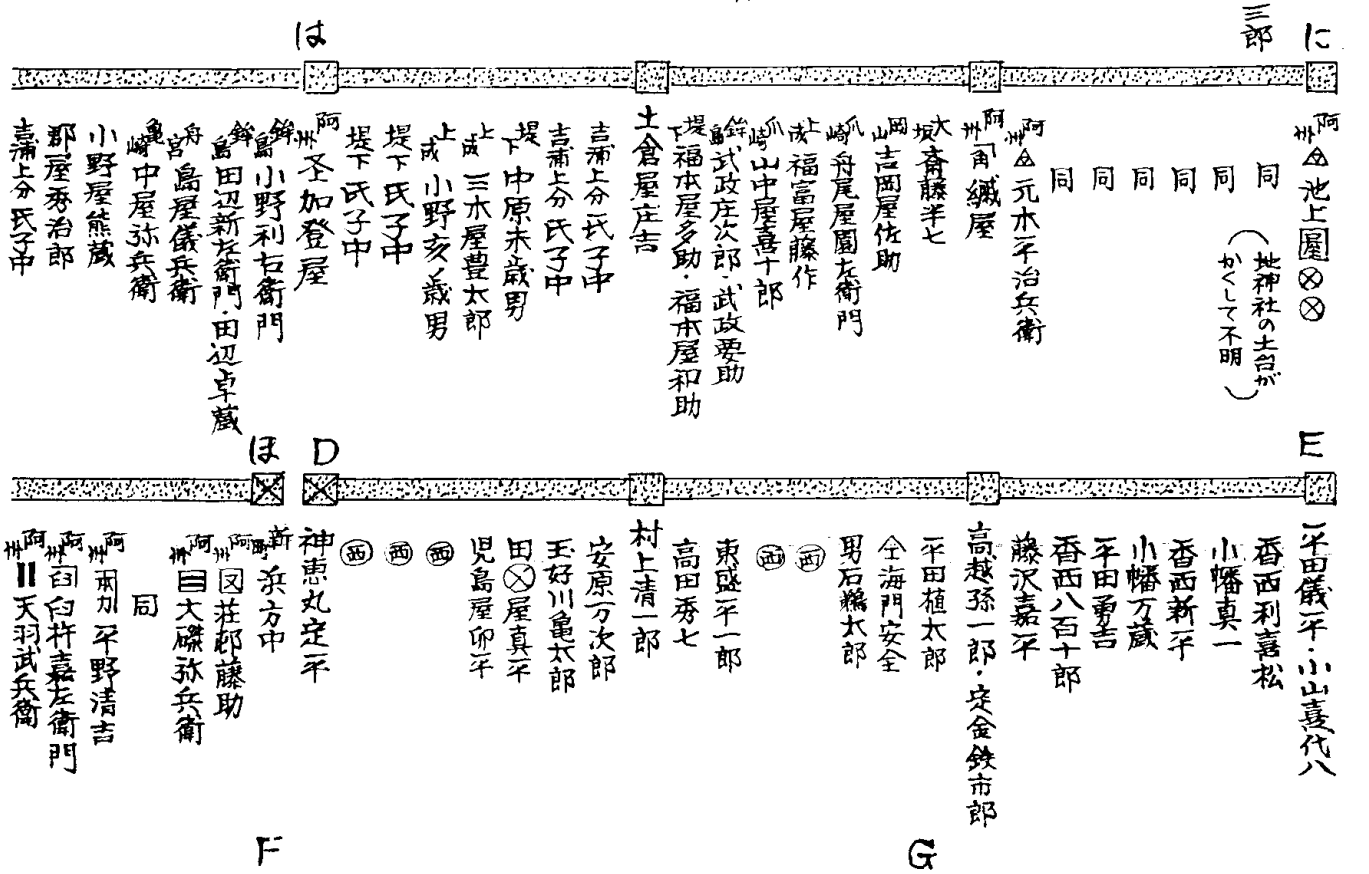
(2) 上の写真は表参道入口南側の玉垣で、13ページ下の写真・表参道入口北側の玉垣と対になる。

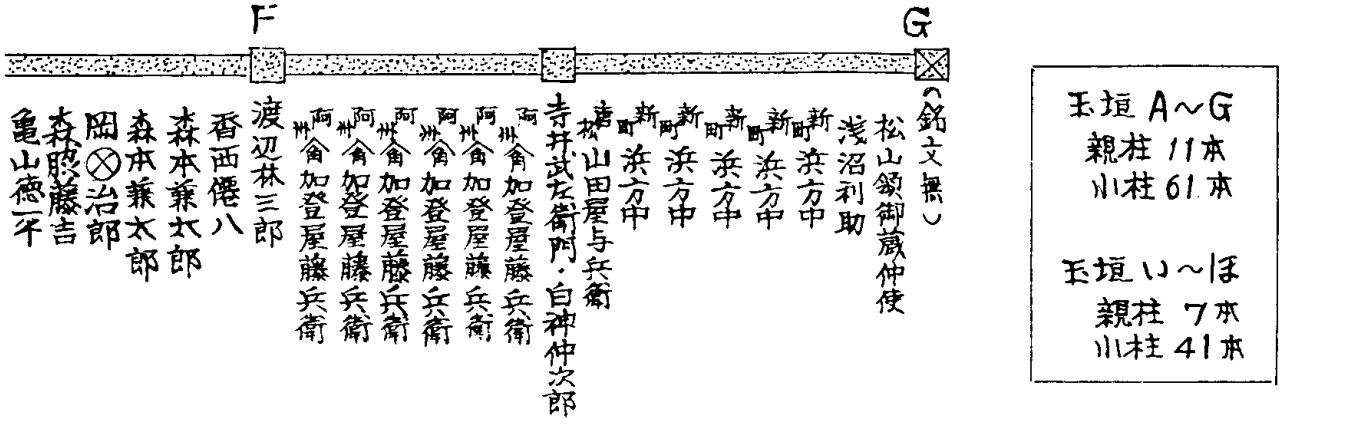
‖続・表参道玉垣‖



境内外周 北側玉垣の配列と刻銘







玉垣 A～G
親柱 11本
小柱 61本

玉垣い～ほ
親柱 7本
小柱 41本

上の写真は境内北・神庫前の剣先型親柱の玉垣列……写真中央の電柱そばの井上栄三郎の名が見える親柱に▨の影が見える（右上図参照）が，かっては玉垣は左折せず，井上栄三郎名の親柱から一直線に延びていたと考えられる。

同じことが上の写真右端・房屋の文字が見える親柱にも笠石のホゾ穴跡が見える。これは下の写真の擬宝珠親柱の玉垣列の左端に当る親柱である。この玉垣列のすぐ後ろにはコンクリート製の外壁が巡らされていることから考えて，後からここへ移動して据え置いたものと思う。

本殿の裏手に当る境内北の擬宝珠親柱の玉垣列……かっては背面参道にあったものではないかと思う。

絵馬堂兼休憩所の両脇にわずかに残る剣先型親柱の玉垣列

上の写真の玉垣列の右方向に，かつては玉垣が連なり延びていたと思われる。その玉垣が下の写真の玉垣列ではなかったかと想像している。
剣先型親柱に彫られた文字の大きさや形，彫りが深く豪快な感じが似通っていることから推測してみた。　境内西側……現在駐車場と化した付近に延んでいたのではないかと考える。　建立の年代は不明であるが明治4年か同5年ごろではないかと推測している。

熊田神社の裏手にかくれるように並ぶ剣先型親柱の玉垣列

▲玉垣配列の複雑さ▼

(ア)境内外周(北側)玉垣

①16ページ図「A〜C」剣先型親柱の玉垣列は、もとからこの付近にあったものと想像するが……

②16ページ図「い〜ほ」擬宝珠親柱の玉垣列は、かつては背面参道の南側に配置されていたものが、都合によって移動したと考える。

③16ページ図「D〜G」剣先型親柱の玉垣列は境内外周用として、もとは現在の水谷宮など摂社がまつられている拝殿前付近にあったものと推測する。

(イ)背面参道玉垣

①20ページ図「B〜C」擬宝珠親柱の玉垣列は、もとから配列されていたと思われ、さらに「C」から下手へ幾つかの玉垣がかつてはあったが、どこかへ移動したと考えられる。

②20ページ図「い〜ほ」剣先型親柱の玉垣列は分断されてばらばらになったような感じだが、もとは境内外周用として境内の西側——現在の駐車場付近にあって、8ページ左下図「(あ)〜(い)」の玉垣列と連なっていたと考えられる。

(資料)「羽黒山を攀る」

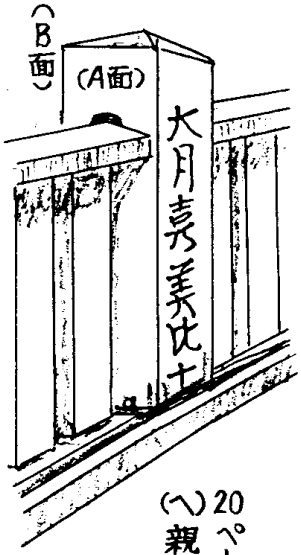
……(前略)……ともあれ、羽黒様は子供の冒険心を満足さすに充分な遊び場所でもあった。赤沢電機店横前の石垣を攀登って棚へ上がるのである。棚は二段あり、最後は玉垣を乗越えて境内に登頂を極めると、クライミングは終了するのである。

……(中略)……

今も羽黒様へお参りして、境内の西、玉垣へ寄って佇めば、吹上げる潮風は老松の梢を揺って颯々と、冒険に明暮れした、ゆきし日の回想を甦らせてくれるのである。

玉島今昔物語子供風土記　亀山茂樹編著　昭四二発行より

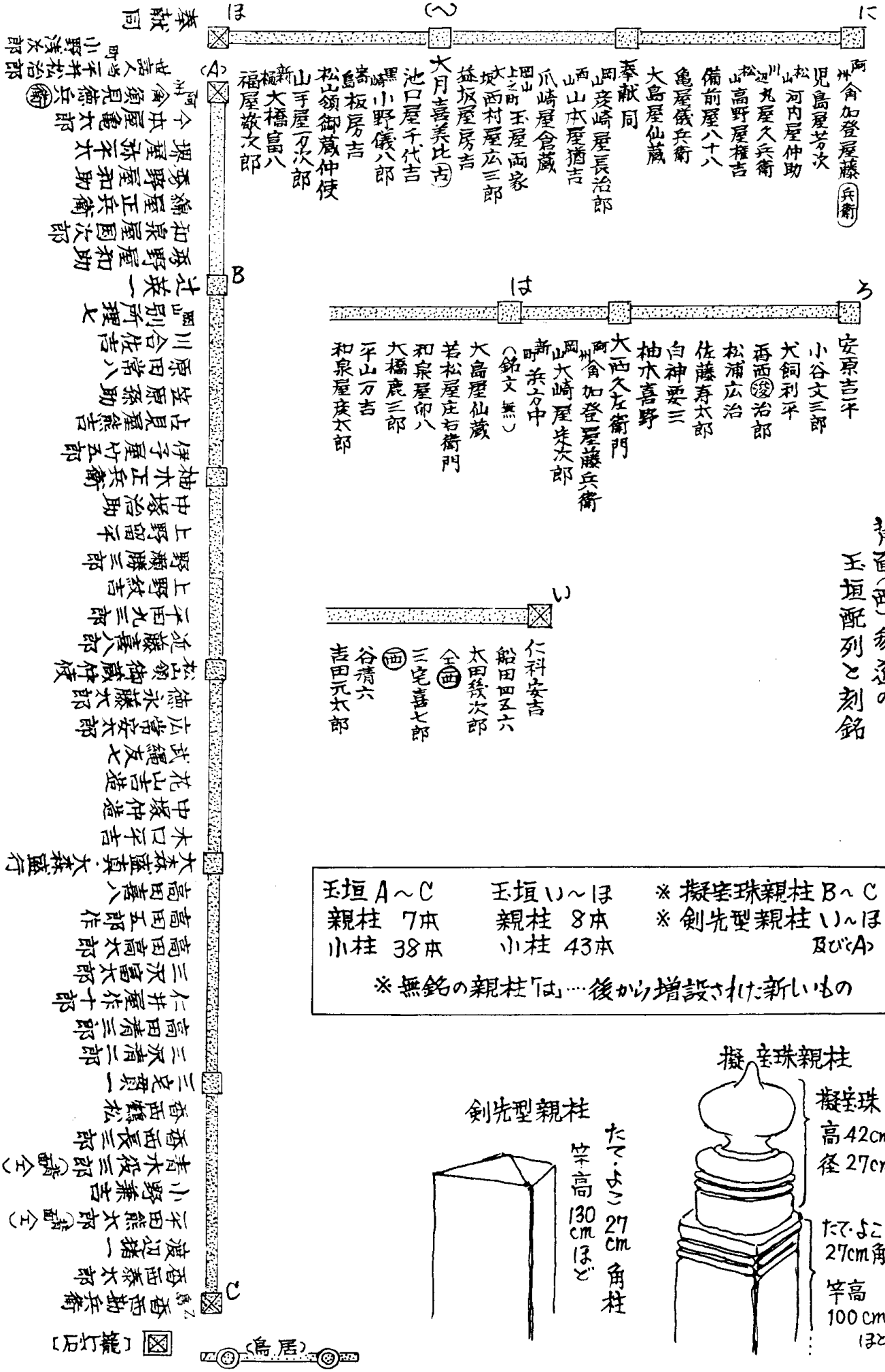
註記



(ウ)20ページ図上部親柱の図化
21ページ下の写真も参照

(笠石)

赤年八月吉祥日……A面には建立年代が刻まれているが、笠石でかくされて不明——残った文字と剣先型親柱の玉垣建立が明治時代に集中することから明治四辛未年と判断した。またB面(親柱背面)には笠石のホゾ穴跡が埋めてつぶされている。元来は角柱であったことをうかがわせる。



背面（西）参道の
玉垣配列と刻銘

玉垣 A～C	玉垣 い～ほ	※ 擬宝珠親柱 B～C
親柱 7本	親柱 8本	※ 剣先型親柱 い～ほ 及び A
小柱 38本	小柱 43本	

※ 無銘の親柱「は」……後から増設された新しいもの

背面参道北側・中ほどの擬宝珠親柱の玉垣列……写真の右端玉垣が下の写真左端へ連なる

上の写真・擬宝珠親柱の玉垣列はもとからこの位置にあったと考えられる。写真左端親柱に笠石のホゾ穴跡が埋めつぶされているのが見える。かつては玉垣がさらに下手へ連なり住吉宮の銘がある石灯籠付近まで延びていたと思われる。　下の写真の剣先型親柱の玉垣列は、もと境内の西から北にかけてあったものが、ここへ移されたと考えられる。

玉垣の配置が北側の一方だけというのが珍しい。多分、自動車の乗り入れが便利なようにと参道を拡幅改良舗装したことで南側の玉垣が取り払われたのであろう。（昭和45年ごろと思う）

背面参道の上部から地下道入口付近の剣先型親柱の玉垣列……なんとなくぎくしゃくした感じ……

写真上・正面参道の中ほどにある注連柱
……神前に不浄なものの侵入を禁ずる印の
注連縄(しめなわ)を張るために設けられた柱（7ページ参照）

写真下・拝殿西脇にある大きな石灯籠
天保四癸巳（一八三三）正月吉辰　守屋要蔵積信謹建
寛政年間（一七八九～一八〇一）から計画着工した乙島新開
は度々の訴訟沙汰で困難を極めた。工事の無事と
新田完成を祈願して建立したものと想像している。

同じような石灯籠が拝殿東脇にもあり、安永三
甲午（一七七四）九月吉辰　萱谷半重郎親純謹建とある。
新町問屋西国屋萱谷氏は宝暦八年（一七五八）京都の
仏師に青銅露坐地蔵菩薩坐像を造らせて円通寺に
寄進している。　安永元年（一七七二）江戸の目黒行人
坂の大火でこの地蔵菩薩が消火作業に大活躍した
といい、当時の人は火消し和尚と呼んだという話
が残っている。　石灯籠は父の遺業にならって一
家の繁栄を願い寄進したのかと憶測する。

‖ 総括 ‖

▲玉垣建立の推移▼

嘉永三年（一八五〇）　羽黒宮社殿の老朽化に伴い再建
本殿再建完成

安政二年（一八五五）　本殿外周玉垣建立（擬宝珠柱玉垣群）

安政四年（一八五七）　幣拝殿再建完成

安政五年（一八五八）　幣帛使昇殿門建立・本殿外周玉垣一部改修

元治元年（一八六四）　正面参道玉垣再建（擬宝珠柱玉垣群）

明治十五年（一八八二）　境内外周（正面参道上の両側）玉垣建立（剣先柱玉垣群）

明治二十五年（一八九二）　表参道玉垣建立（剣先柱玉垣群）

補記参考

背面参道玉垣の建立年代は不明であるが、正面参道玉垣再建のころではないかと想像する。

境内外周の西から北にかけての玉垣建立の年代がはっきりしないが、明治四年から同五年にかけてのことであろうと推測する。

16ページ　図上部　親柱A
20ページ　図上部　親柱（ヘ）
19ページ　下段　註記
参照

平成十年五月　七福神石像建立…本殿底下に水彩の精巧な七福神の存在を知る人は少ない…今では石造祠に収まり庇を借りて母屋を取った感じ…

羽黒宮本殿の西側・背面とに見える七福神石像（2体は東側にあり）

羽黒宮本殿の千木・堅魚木が載る大屋根
大屋根の棟の鬼瓦や正面の破風屋根棟に
は卍の紋様が見える

写真上・神社建築では神殿の妻側(側面)は切妻型が多いが，羽黒宮では入母屋型で庇が大きく張り出し大屋根になっている。また，千木・堅魚木にまじって卍紋様など神仏混淆がうかがえる。
写真下・大屋根庇裏の二重繁垂木や大屋根を支えるための柱上部等の斗(ます)肘木(ひじき)などの複雑で緻密な組物の構造が見え，職人技のすばらしさと共に再建にかけた当時の人々の願いや意気込みが感じられる。

本殿大屋根を支える庇下の組物と頭貫(かしらぬき)と呼ばれる横木の上に七福神の一部恵比寿・弁才天が見える